

交流会1 「修士論文を投稿するためのプロセスと方略」

修士論文を投稿するためのプロセスと方略

My Process and Strategy for Posting a Master Thesis.

八木 哉子

Kanako Yagi

1. はじめに

この交流集会は、修士論文を投稿するためのプロセスと方略について共有し、投稿の意欲につながるディスカッションをしたいと考え企画した。そこで、船木先生に声をかけ、一緒にこの交流集会を担当してもらうことになった。お互いに修士論文を投稿するプロセスについて話し合いを重ねるなかで、修士論文を研究論文としてまとめるためには、内容の精度を高め再構成する必要があるが、論文掲載までたどりつかないことが多いのはなぜだろうと考えるようになった。これでは、研究によって得られた知見を臨床に還元することができないばかりか、看護学の発展に寄与することができないからである。そこで、お互いが修士論文の投稿のプロセスを提示し、これから修士論文を投稿しようと考えている方々に貢献したいと考えた。私が経験した修士論文を投稿するためのプロセスと方略について発表した内容を紹介したい。

2. 発表内容

私は、2013年3月に神戸市看護大学大学院博士前期課程を修了した。修士論文のテーマは、「慢性腎臓病とともに生きる人のHope～腎臓内科外来に通院する人に焦点をあてて～」であり、慢性腎臓病とともに生きる人のHopeを日本語版 Herth Hope Index (HHI) で測定し、Hopeに関係する要因を明らかにすることを目的とした量的研究を行った。この研究が、論文採択に至るまでの1.モチベーションの維持、2.指導教員への相談方法、3.投稿先の学

会の選び方、4.論文のまとめ方、5.査読結果の受け止めと対応、6.掲載までの経過、7.まとめ(課題と方略)など、各ポイントに沿って自身の経験を述べたい。

1)モチベーションについて

大学院を修了した後、研究参加者の声を世に届けたいと考え、また研究に協力してくださった医師や看護師の方々の思いから、論文投稿に取り組もうと考えていた。しかし、実際には新しい仕事に追われる日々であり、修士論文をまとめなおす余裕がなかった。それでも投稿しようと考え取り組むことができたのは、研究参加者への思いに応える必要性と、研究が透析予防のための看護が提供される仕組みにつながってほしいと考えたからであった。

2)指導教員への相談方法

投稿にあたり、指導教員への相談は、論文を投稿する前、査読結果の返却があったとき、修正の論文の送付する前に、メールあるいは面談で行った。特に、査読内容の解釈が妥当かどうかについて、修正する前に指導教員に確認することが重要であった。また、査読に対する返答を自分で書き、それが査読者に伝わるかどうかをみてもらうことも大切であった。指導教員とのやりとりのプロセスでは、私自身が何に困っているかを明確にして伝えるよう心がけた。

3)投稿先の学会の選び方

投稿先の学会は、「日本慢性看護学会」を選んだ。1つ目の理由は、自分の専門領域だからである。2つ目は、「Hope」の概念を研究のテーマにしていることから、学会の目的のひとつにある「慢性の構成

概念の抽出」に寄与できるのではないかと考えたからである。

4) 論文のまとめ方

修士論文には文字数の制限がないため、私の修士論文は、約100,000字で構成されていた。それから、学会の投稿規定で指定された15,000字の論文にまとめるための方法として、単純に削除するという方法で文字数を減らした。その結果、論文のストーリーが不明瞭となり、研究の背景や意義が伝わらなくなってしまう。そこで、指導教員に相談し、またHopeを用いた先行研究を参考にしながら、論文のストーリーを再構成した。振り返ってみると、修士論文から論文にまとめなおすには、あらたな論文を書く必要があったことに気がついた。

5) 査読結果の受け止めと対応

査読は、計4回受けた。なぜなら、2回目の査読を受けた後、修正論文を送るのが遅れてしまい、新規投稿論文として取り扱われることになったためである。計4回の査読では、多くのことを指摘されたが、「重回帰分析の統計手法」と「Hopeの定義」の2点が重要なポイントであったと考える。

まず、「重回帰分析の統計手法」については、重回帰分析に投入する変数の選び方が誤っていた。しかし、1回目の修正では、自分で調べて「統計方法に誤りはない」と回答したところ、2回目の査読で修正不十分であると指摘された。指導教員に相談し、統計学の専門家に相談したことによって、重回帰分析の変数の選び方の誤りに気がつき、正しい統計方法でやり直すことができた。

次に「Hopeの定義」については、HHI(尺度)の定義を採用せず、HHIを使用した先行研究の定義を採用していた。しかし、査読者から、定義として抽象的であり、検討が必要であると指摘があった。定義を変更することによって、研究の前提が揺らぐことになるのではないかと思い、当初の定義を採用したままにしていたが、繰り返し指摘を受けた。そのため、指導教員に相談し、定義を見直すことにした。それが掲載に至る最終的な決め手になった。

査読結果には厳しい指摘が多々あり、研究全てが否定されたように感じるがあった。そして、査読後の修正期間は6週間であったにもかかわらず、現実を受け止めることができず、すぐに修正に取り組むことができなかった。2週間程度経過してから指導教員に相談し、査読結果の解釈や修正の方向性

を支援してもらったが、実際には修正の十分な時間を確保することができなかった。

6) 掲載までの経過

掲載までの時間経過は、1回目は、2014年9月に学会に送付、10月に査読結果の返却、2015年1月に修正論文を送付した。2回目は、2015年3月に査読結果の返却、10月に修正論文を送付したが、期限内に送付できなかったために新規投稿論文として扱われた。3回目は、2016年1月に査読結果の返却、2月に修正論文を送付した。4回目は、6月に査読結果の返却があり、8月に修正論文を送付した。そして、9月に採択する連絡があり、12月に学会誌に掲載された。投稿してから約2年、大学院修了後約4年で、論文掲載となった。

論文の種類については、当初は「原著論文」を目指して修正をすすめていたが、査読を受け、最終的には「研究報告」として採択されることになった。採択時、査読者からのコメントを読み、2年間あきらめずに修正に取り組んでよかったと思った。また、論文の質が良くなるよう査読していただいたことに感謝の思いが湧いた。「原著論文」で採択されなかったことは残念であったが、査読のプロセスを考えると当然の結果であったと考えている。

7) まとめ(課題と方略)

今まで修士論文を投稿するプロセスを述べてきたが、課題と方略を整理したい。まず、査読結果を受け止められず、すぐに修正に取り組めなかったことについては、自分の気持ちを他者に聞いてもらい整理することが必要であった。次に、統計方法を指摘されたときは、自分で調べることも大切であるが、専門家にスーパーバイズを受けることが重要であった。3点目は、Hopeの定義への指摘を安易に受け止めていたため、それを重要な修正ポイントとして認識し、早期から真摯に受け止めて検討すべきであった。4点目は、査読後の修正期限を守れなかったことについて、自分のスケジュールを調整し期限を守るべきであった。最後に、4回もの査読を受け投稿に至ったが、1回目の査読を読み直すと重要な指摘が全て含まれていた。無償で行われている査読に感謝の気持ちをもって修正に取り組み、1回目の修正でできる限り尽くすことが重要であると考えた。

3. おわりに

この交流集会を企画する中で、船木先生との話し合いを通じて、次のことにも気づきがあった。まず、論文投稿のスケジュールは、査読者からの返答の時期を予測し、自分のスケジュール管理を行うことである。次に、指導教員とよく相談し解釈を共通認識させることである。何より解釈が独りよがりにならないことが重要である。3点目は、査読への回答方法である。査読者が指摘した内容を文書に掲載してから回答を記載すること、また修正前と修正後の文章も載せ、かつ論文のページや行も併せて掲示し、査読者が読みやすいように配慮することである。

交流集会は船木先生と私の経験を発表し、査読経験のある神戸市看護大学の池田先生、江川先生からもコメントやアドバイスを頂戴した後、参加者とグループワークを行った。そこでは、論文投稿者と査読経験者の意見を踏まえ、参加者は、投稿するための自分の課題や具体的な査読への対応方法をディスカッションすることができた。参加者からは良い評価をいただくことができた。アンケート結果の詳細は、船木先生の内容を参照していただきたい。

最後になるが、今回の交流集会の参加をとおして、ひとりでも多くの方が論文投稿を試みようと思えるきっかけになれば幸いである。